

ゾラにおける聖女アニェスの「黄金の長い髪」の変奏

—『黄金伝説』から『夢』、『長い髪のヴィオレーヌ』へ—

Les Variations de la chevelure dorée de la Sainte Agnès chez Zola

—De *La Légende dorée* au *Rêve* et à *Violaine la chevelue*—

橋 本 政 子

Masako HASHIMOTO

はじめに

ゾラの『ルーゴン＝マッカール叢書』の十六巻『夢』は1888年に執筆されたが、他の叢書の作品とは特徴が大きく異なる作品である。1867－1868年に計画された『ルーゴン＝マッカール叢書』には予定されていなかった作品であり、家系樹にゾラが接ぎ木して出てきた言わば「若芽¹」の作品である。第二帝政下におけるある一家族の生き様を通し、近代社会を「遺伝」と「環境」をベースに描いていく『ルーゴン＝マッカール叢書』の中であって、『夢』のように空想的で幻想的な作品は珍しく、「人が自分に期待していない作品²」、を試みた。つまり「以前に書いてきた作品や、批評家たちがゾラに対して抱いているイメージと比較すれば、この作品の独自性を創っている要素—純粋性、心理、未知の存在—を発展させ、思考した作品である点で異なっている³」。準備草稿によると、最初の筋書きは人生を科学—交霊術—の研究に打ち込んできた四十代の男が、十六才の若い娘との恋にとりつかれ、現実世界から逃避する「夢」を体現するというものであった。しかしその後、筋書きは三度書き直され、結局若い男女同士の恋愛に変更された。

舞台設定の決定については遅く、若者の父をオートクール城主である侯爵から司教に変えることを決めて以降、ユイスマンスの勧めから⁴、ゾラは1549年に出版され、ヤコブス・デ・ウォラギネにより編纂された『黄金伝説』を、1843年にギュスターブ・ブリュネがフランス語に翻訳したものに出会うことで、教会という歴史的建造物の周辺に舞台背景を設定した。ゾラはそれまでに自分の構想していた主人公の若い娘の神秘主義を正当化しようと模索していたが、『黄金伝説』の中に十三才で殉教した聖女アニェスを見出

¹ Émile Zola, *Le Rêve*, *Œuvres complètes*, Nouveau Monde, 2006, t.13, p. 571. Lettre de Zola à van Santen Kolff du 5 janvier, 1888. 「もしあなたが家系樹の中に私の新作『夢』の主人公の名を探そうとしてもそこには見当たらないだろう。それは私が接ぎ木した若芽だからだ。」とオランダの批評家コルフに手紙で打ち明けている。

² Dossier préparatoire, Bibliothèque nationale de France, N.a.f. 10324, f° 217. 『五人のマニフェスト』が示すように、『大地』以降ゾラに対する批判は激しさを増した。「人」はこの場合、ゾラのほぼ定期的な出版される小説を待っている読者たち、またゾラのイメージをポルノ的で、稚拙な心理学者と非難する反自然主義の批評家たちを指すと、フィリップ・アモンは述べている。

³ Émile Zola, *Le Rêve*, préface de Roger Ripoll, Le livre de poche classique, Librairie Générale Française, 2003, p. 254.

⁴ Émile Zola, *Le Rêve*, « Bibliothèque de la Pléiade », Gallimard, 1966, t. IV, p. 1643.

した。そして、聖女アニエスの描写は、ロマネスク様式教会群の中でも、ヴェズレーのポルタイユに刻まれた作品に依拠して想像されていく⁵。『黄金伝説』が準備草稿に加わったのは、筋書きの全体構想の後に書かれた、第二詳細プランの手直しの時点であった。

『夢』の主人公アンジェリックはルーゴン家の系列で、『獲物の分け前』の主人公サッカールの妹シドニーの子供にあたる。しかし、この小説においては『黄金伝説』の聖女アニエスの現代版のような、十九世紀フランスに生きる、社会的な殉教者として造形されている。出産後すぐに母親に見捨てられ、他人に次々と預けられるが、最終的に家を逃げるように出て街をさまよひ、教会の門にたどり着くのが最初の場面であり、打ち捨てられた不幸な少女として物語の冒頭で提示されている。そして現実的困難に追い込まれながらも、不運を乗り越えて、自ら信じること—『黄金伝説』の聖女アニエスと同様、イエスのような男性と結婚すること—を実現させるかに見えるが、彼女の希望が完遂したその直後に絶命し、あたかも彼女の人生は「夢」だったかのように消える。その儚い彼女の人生が閉じられる最後の場面もその教会の門であった。この小説は十九世紀に生きるアンジェリックという娘の一生であるが、ゾラは準備草稿に『黄金伝説』について内容を記したメモを残している⁶。本稿では、その『黄金伝説』と『夢』のつながりとして、共通して出てくる「黄金の長い髪」のモチーフに注目し、それがどのように『夢』で展開されているかを考えたいと思う。

さらに、「黄金の長い髪」の変奏は、『夢』だけで終わるのではない。それは、『夢』の九年後、1897年に書かれたと思われるオペラ台本『長い髪のヴィオレーヌ』でも重要なモチーフとなっている。ジャン＝ルイ・カバネスはこの作品について、草稿資料は消失しているが、おそらく『夢』の草稿資料の聖女アニエス伝の「長く伸びた黄金の髪」から着想を得たのであろうと述べている⁷。『長い髪のヴィオレーヌ』で、同じ「黄金の長い髪」がどのようにまた変奏され、髪を象徴としてゾラが表現したかった思想とは何なのかを考察する。そのためには『長い髪のヴィオレーヌ』を『メシドール』と比較することが有効と思われる。なぜなら、ゾラ自身が「この二つの作品は同じリアリズムの思想を違う形式で表したものである⁸」と述べているからであり、髪は『メシドール』には出てこないが、髪の色である「黄金の」色が散りばめられた作品であり、『長い髪のヴィオレーヌ』の「黄金の長い髪」の意味を知るためには欠かせない作品だからである。このオペラ台本の書かれた時期は、ゾラが『ルーゴン＝マッカール叢書』を書き終え、新たなゾラのシリーズ『三都市』、『四福音書』などゾラの後期の作品群へと移る過渡期にあたる。『ルーゴン＝マッカール叢書』の中で、ゾラが表象してきた近代社会の腐敗や悲惨さに対する幻滅から、後期作品群に見られる「友愛」や「豊かさ」を基盤とする理想社会の希求へと、ゾラの根本思想が大きな転回点を迎えるにあたって「黄金の髪」が何を伝えているかを考察したいと思う。『メシドール』は『長い髪のヴィオレーヌ』の三年前に書かれており、「黄金」のイメージが散在するオペラ台本である。私たちは『メシドール』と『長い髪のヴィオレーヌ』を比べることによって、『メシドール』において偏在していた「黄金」が、『長い髪のヴィオレーヌ』では髪に集中していることに注目したい。

第1章：『夢』における聖女アニエス

1-1. 聖女アニエスのイコノグラフィ

『黄金伝説』とは、ドミニコ会士ヤコブス・デ・ウォラギネが中世に編纂した聖人伝説集であり、同時代

⁵ *Ibid.*, p. 1946.

⁶ Émile Zola, *Le Rêve*, préface de Roger Ripoll, Le livre de poche classique, Librairie Générale Française, 2003, p. 271. ゾラは黄金伝説を読み、集めた資料を『夢』にどのように使うかを草稿資料 (N.a.f. 10324, f° 2- f° 7) に記録した。

⁷ Jean-Louis CABANÈS, « Les chevelures de légende dans *Le Rêve* et *Violaine la chevelue* » Gisèle Séginger (éd.), *Zola à l'œuvre*, Presses Universitaires de Strasbourg, 2003, p.147.

⁸ Préface de Frédéric Robert, Émile Zola, *Œuvres complètes*, Cercle du Livre Précieux, 1969, t.15, p. 635.

の読者たちが「黄金」の美称を冠したものである。フランス語の翻訳本は、1843年にギュスターブ・ブリュネが行い、出版された。神々や英雄を持たない一神教であるキリスト教は、聖人や殉教者と呼ばれる人物たちの言行や生涯を伝説化し、また神話化する道を選び、『黄金伝説』は中世において聖書とならび、キリスト教的ヨーロッパの教化に役立ち、特に造形芸術の源泉ともなった。ゾラはその翻訳本の序文で、ブリュネが『黄金伝説』は「小説の魅惑をすべて持っている」と記述していることに興味を引かれた⁹。準備草稿には、聖人たちの誕生や人生、歴史や使命、また善や悪との闘いにおける悪魔の存在、殉教やそれに伴う拷問、奇跡、また親しみのもてる愉快的伝説の側面などについて概略をメモしている¹⁰。多くの聖人の中で、とりわけゾラが目にしたのが、十三才で殉教した聖女アニエスである。ブリュネの翻訳本を読んだ後、ラテン語で著された『黄金伝説』の原書¹¹に遡り、参照している。

聖女アニエスは、イエスを熱愛しているが、ある時ローマ郡長官の息子に見染められ、言い寄られる。すでに婚約していることを理由にその若者を拒絶するが、その息子の父—長官であり裁判官—は、甘言で籠絡しようとし、ついで権力をもって威しをかけて意に従わせようとする。しかしアニエスはいずれにも屈せず拒否したため、アニエスの婚約者がイエスだと知らされた長官は、アニエスがキリスト信女であることを楯に処罰しようとする。改宗するか、娼婦たちと一緒に肉体を汚すかの選択を迫る。その時髪が救うのである。

「わたしは、あなたの神々に供物をささげるつもりはありません。しかしまた、あなたは、わたしを下劣な汚れで傷つけることもできません。私には、私のからだを守ってくれる天使が、主の御使いがついているからです。」そこで、裁判官は、彼女の服をぬがせ、一糸もまとわない全裸の姿で娼家へ引きたてていくように命じた。しかし、主は、アニエスの髪の毛をふさふさと厚く伸ばされたので、彼女の全身は、衣服をつけたときよりも完全に髪の毛におおわれた¹²。

主イエスへの愛、信仰心がアニエスの純潔性を守るために、髪の毛の奇跡を実現させた。主イエスを信じることにより、主は人間の身体に力を及ぼし、自然の法則を超えた超自然の現象を髪に起こす。裸体を髪が覆うことにより十三才の乙女の心を苦悩から解放する。

この恥辱の場所に着くと主の使いの天使が待っていて、巨大な明かりでその場所を照らし、彼女に真っ白な服を差し出した。このようにして娼家は祈りの場所となり、この神々しい輝きを拝んだものは、来た時よりも、より清浄な身体になって帰っていくのであった¹³。

聖女アニエスは、天使の明かりで神々しく輝き、体を包むほど伸びた奇跡の髪と共に、家じゅうが光で輝き、その光を浴びた人の身体も浄化していく。

この神聖であるが、簡明なアニエスの物語の中で、ゾラは長く伸びた髪という一点に注意を引き込まれた。ゾラは、アニエスの長く伸びた髪に、宗教的信仰心の強さよりも、未知の力、超自然が生み出す髪

⁹ Jean-Louis CABANÈS, « Réver *La Légende dorée* », *Les cahiers naturalistes*, 2002, p. 30.

¹⁰ Dossier préparatoire, N.a.f. 10324, fo 2. 準備草稿には「黄金伝説は最初にアンジェリックの教育に結び付けられること。第2章は全部これに充てる。順序は1. 聖人と聖女の誕生、人生、歴史、禁欲、総合。2. それに対峙させ、(アンジェリックの遺伝と環境の) 悪と善の闘いを打立てるための悪魔 3. 殉教者たちの拷問とそれに由来する奇跡。4. 子供のアンジェリックを笑わせるための滑稽な事。5. それをからかう動物たち。(行間に込める)」と記。

¹¹ *La Légende dorée*, l'édition de 1549 chez Saint Jehan Baptiste.

¹² Jacques De Voragine, *La Légende Dorée*, Texte traduit par Alain Boureau, Gallimard, 2004, p. 141.

¹³ *Ibid.*, p. 142.

不可思議さを感じ、同時に視覚的な価値を見たのではないかと考えられる。このように、ゾラは長い髪の価値を拡大し、誇張しているように見える。奇跡によって身体は無垢を保護し、神秘性を高めた美しい髪のイメージにゾラは想像力の発露を見いだしたのではないかと考える。だからこそ、奇跡の髪のアニエスの図像にこだわったのではないか。1549年の原書には、版画による多くのイコノグラフィが掲載されていたが、ゾラはその版画を詳細に調べ、それに頭見出しをつけてリストにしている¹⁴。しかしアニエスについては、首に剣を突きさされた姿のイコノグラフィ¹⁵以外見つからなかった。そのため、1888年4月1日より、10月15日まで、二週間に一度の割合でこの小説が連載された『ルビュ・イリュストレ』誌では、版画二枚と小さな挿絵が添えられていたが、それには裸体を長い髪で覆われている姿の「エジプトのマリア¹⁶」が代わりに注釈と共に載せられた¹⁷。ゾラにとって、視覚に訴えるイコノグラフィは重要であり、特にアニエスの長く伸びて身体を包んだ髪の図像は大きな意味を持ったと思われる。

1-2. アニエスとアンジェリック

ゾラは聖女アニエスを、『夢』の主人公アンジェリックに反映させるために、まず視覚的なアプローチから始める。すなわち、アニエスのイコノグラフィの前で、『夢』の主人公アンジェリックが倒れているシーンで二人を会わせる。イエスへの愛の純潔性を持ち、天上で結婚している聖女アニエスのイコノグラフィと、自然の厳しさと環遇の悲惨さで押しつぶされ、石化したと見まがう無垢なアンジェリックの肉体とを並置させることによって、相似性を強調し、両者を融合させている。

乙女の像は柱の上に立ち、白い棕櫚を手にして、白い子羊を連れ、この不動の厳しい寒さの中で、純白の清らかさと無垢な雪のような肉体を備えていた。その静止した厳しい寒さは彼女の周囲で勝誇る処女性の神秘的な希求さえも凍らせていた。それから、彼女の足元にはもう一人のみすぼらしい子供が白い雪にまみれ、また石になったのかと思わるほど固く白くなって、もはや大きな乙女たちと区別がつかないほどだった¹⁸。

ゾラはパノラマ的視線で、アンジェリックが聖女アニエスの彫像群の一部であるかのように提示し、聖女アニエスと、ゾラの造形であるアンジェリックを判別できないほど一体化させながら、二人を同化させていく。

イコノグラフィに表象される『黄金伝説』の聖女アニエスと、ゾラのアニエスともいえる『夢』のアンジェリックは、いずれも思春期の乙女であり、純粹無垢という点でも、また精神的に意図が明確で、結婚したい、裕福になりたい、などの願望も同じであり、さらに外見的にも芳香を放つ金色の長い髪で、紫色

¹⁴ Torahiko Terada, « Des saints de *La Légende dorée* au *Rêve* : la genèse des stéréotypes », Gisèle Séginger (éd.), *Zola à l'œuvre*, Presses Universitaires de Strasbourg, 2003, p. 142. 1549年出版の『黄金伝説』の挿絵のメモを取りながら、ゾラは個人的考察を記述している。

¹⁵ *Ibid.*, p. 142. N.a.f. 10324, f° 69 et 70. Feuille 32. 刷り物 [feuille] の番号は1549年出版の『黄金伝説』の中に掲載された版木の番号を指す。ゾラが付けた番号ではない。

¹⁶ *Ibid.*, p.142. N.a.f. 10324, f° 69 et 70. Feuille 68.『エジプトのマリア』は裸体で髪に覆われている。

¹⁷ Jean-Louis CABANÈS, « Rêver *La Légende dorée* », Les cahiers naturalistes, 2002, p. 43. 元来エジプトのマリアはゾラが記録の中で書いたように、裸体を長い髪に覆われた姿で表象される。しかしアンジェリックの守護神である聖女アニエスと混同される恐れがある。ゾラは小説の最初から長く伸びる髪の奇跡を語るが、その混同を避けるため「砂漠で悔悛するエジプトのマリア」という説明を付けた。

¹⁸ Émile Zola, *Le Rêve*, *Œuvres complètes*, Nouveau Monde, 2006, t.13, p. 576. 以下、日本語訳は執筆者による。拙訳については、次の既訳を参照させていただいた。エミール・ゾラ『夢想』、《ルーゴン＝マッカール叢書》第16巻、小田光雄訳、論創社、2004。

の瞳を持ち、美しいという点でも共通している。

『黄金伝説』の聖女アニェスの婚約者であるイエスに照応するフェリシアンが、何世紀も前にペストに罹った人々を救ったという伝説のオートクール侯爵家を讃えるための「奇跡行列」に、司教が被る司教冠の刺繍を頼みにアンジェリックの家に来るが、アンジェリックは刺繍の下絵に聖女アニェスを見つけ、高揚する。そして、ここでも聖女アニェスの長い髪が強調される。

アンジェリックは彼が彼女の前に置いた大きな用紙の上に身をかがめていて、軽い感嘆の声を上げた。「ああ、聖アニェスですわ！」確かにそれは十三歳の殉教者、裸体で髪の毛を身にまとっている乙女であり、髪の間からは小さな足と小さな手だけが覗いていた。それはカテドラルの扉のひとつにある、一本の柱の上にある姿そのものだった。とりわけカテドラルの内部でみられる姿のままであり、昔に彩色された古い木彫の像は、今日になって鹿毛色のブロンドになっていて、時を経て、全く黄金色になっていた。彼女は司教冠の正面全体を占め、立って、恍惚として天を仰ぎ、二人の天使によって連れていかれようとしていた¹⁹。

オートクール家の末裔であるフェリシアンが描いた聖女アニェスであるが、アンジェリックはそれが自分に似ていることを感じているし、彼女に好意を持つフェリシアンは聖女アニェスを描いていると同時にアンジェリックを描いている。そしてフェリシアンの描いた奇跡の髪は、アニェスの裸体を包んでいて、髪の間から小さな手や足を覗かせ、包んでいる裸体を逆に暴露させるかのようにフェリシアンの欲望を表出させる。

一方、刺繍職人のアンジェリックも、この司教冠の刺繍で、聖女アニェスの髪の制作にとても強いこだわりを持つ。フェリシアンの描いた聖女アニェスはアンジェリックにとって、自分自身に思えたからである。金色の髪の刺繍する手法については、従来の手法を使わず複雑なやり方で微妙な色彩を出そうとし、フェリシアンもアンジェリックの考えに、同意する。

そして沈黙が再び起こった。髪の毛について従来とは異なり、アンジェリックもフェリシアンと同じ考えを抱いていたのだった。すなわち絹を全く使わないで金をさらに金で包んでしまうというものだった。そこで彼女は消えていく炎のような暗くて赤い色の金から、秋の森に見るくすんだ黄色い金に至るまでの異なる色調の金の糸を通した針を操っていた。アニェスは首から踝まで金色の髪を流れるようにまとっていた。髪の毛の流れは首筋から始まり、厚いマントーのように腰を覆い、前の方にあふれて、肩の上から二つの波になってわかれ、それが顎の下で合流し、足のところまで流れていた。奇跡の髪だった。大きな丸い髪留めをつけた伝説の金髪であり、純潔な裸体の芳香を漂わせる暖かく、生命を持つ衣服であった²⁰。

聖女アニェスの奇跡の髪の描写は、非常に豊かな色彩と共に、身体をぬうように流れるさまが官能的でさえある。才能ある刺繍職人である彼女の手を通すと、微妙な色彩や複雑な技巧が巧みに重ね合わせられ、奇跡の髪の金色は芸術性を感じさせ、髪の毛の表象は魅惑の高揚感を醸し出す。言葉で綴られる髪の毛のイコノグラフィであり、また、その美しさは「純潔な裸体の芳香」「生命を持つ衣服」など、生命の息吹が感じられ官能的で、至高を生み出す詩的な髪へと変化していく。

このように、『黄金伝説』に書かれたアニェスの髪は「主の恩寵により髪の毛の厚みを増やし、身体を衣服の

¹⁹ *Ibid.*, p. 624.

²⁰ *Ibid.*, p. 628.

ように包んだ」という短く、平明な文体で描かれていたが、『夢』ではゾラの想像力により変奏され、芸術性の高い幻想的な髪へと変わっていくのである。

第2章：髪の奇跡の世俗化、生命化

2-1. 現世に執着し、結婚願望が強い、現代娘アンジェリック

第1章では聖女アニェスとアンジェリックのイメージの同一化を述べてきたが、第2章では二人の相違する面を述べたい。草稿資料にあるように、『夢』のアンジェリックは、「現世に執着している²¹。」点である。アンジェリックは天上ではなく地上での結婚を望んでおり、光り輝く黄金に包まれた裕福な生活への欲望が現世で実現することを望んでいる。それがゾラの考える十九世紀に生きるアニェス、つまりアンジェリックである。

天上でイエスと結婚するアニェスと異なり、『夢』のアンジェリックは、いつか結婚の相手が現れ、この世で結婚したいという願望が強く、その実現を信じている。現実とは別な彼方の世界、捉えられない世界、未知の世界を信じつつ王子様のようなお金持ちの男性がいつか現れ、現実の幸せをつかむと、『黄金伝説』の本を通し、信じるようになるのである。

遠くから世の中を眺めているアンジェリックには、そこが太陽の光に満ち、花が咲き乱れた大きな庭園に見えてきて、世の中は本当に楽しく、悪いはずがないと、楽観的になり、待っている王子様のような結婚の相手を夢想する。

その人が入って来て、君を連れに来たと言うの。その時私は、あなたを待っていたの、連れて行つてと言うわ。そしたらその人は私を連れて行き、そしてことは成就する。永久にね。私たちは楽園にいて、ダイヤモンドをちりばめた黄金のベッドで眠るのよ。ああ、とても簡単なことだよ！²²

聖女アニェスはイエスを愛し、結婚を決めているが、それは天上の結婚であり、現実の結婚ではない。一方、アンジェリックは現世に執着し、地上の愛と結婚を望んでいるのだ。しかし現実—アンジェリックは出自も不明で財産も持たない孤児である—を踏まえた養母ユベルティーヌのアンジェリックに対する忠告に対し、現代娘アンジェリックは明るく答える。

長い沈黙の果てに、アンジェリックは顔を上げた。彼女はからかうような様子でユベルティーヌを眺め、顎をしゃくって繰り返した。「私はその人を待っているわ。そうすればあの人に来てくれる。」このような空想は狂気の沙汰だった。だが彼女はそれに取りつかれていた。そのように事が運ぶであろうと、彼女は確信していた。誰であっても彼女の微笑の下にある確信を揺るがすことはできなかった。(中略)若い娘はあ然として彼女の反論を聞いていた。それから大きな笑い声をあげた。彼女の全ての健全さとすべての生きることへの愛が、この明るく響く笑い声の中に歌われていた。聖女たちの物語とは、はるか昔のことだったのだ！時代は全く変わってしまい、勝利を治めた神はもはやだれに対しても自分のために死ぬことを要求していない。『黄金伝説』の中において、彼女は現世の蔑視や死への憧憬よりも、その不可思議に心を奪われたのだった。ああ、そうだと！確実に自分は結婚し、そして愛し、愛され、幸福であることを願っているのだ！²³

²¹ Émile Zola, *Le Rêve*, préface de Roger Ripoll, Le livre de poche classique, Librairie Générale Française, 2003, p. 272. N.a.f. 10324. ♯2-7 ゾラは準備草稿の中で、「アンジェリックを黄金伝説にどう改作させるかがより重大である。彼女は現世に執着し(« Elle tient à la vie. »)、結婚を望んでいる。それを言うべきであり、陽気にするべきだ。」と書いている。

²² Émile Zola, *Le Rêve*, *Œuvres complètes*, Nouveau Monde, 2006, t.13, p. 602.

十九世紀に生きる主人公にとっては、中世に書かれた『黄金伝説』のアニェスの考えとは全く違い、死への憧憬もなく、現世に対する蔑視も過去のもので、現代ではあり得ないと述べる。『黄金伝説』の聖女アニェスの物語に惹かれたのは、奇跡が起きたという不可思議さに魅力を感じたのだとアンジェリックは言明する。

2-2. 結婚を可能にした髪

髪は、アニェスとは別な意味でアンジェリックの運命を変える。その意味でやはり髪は、奇跡の髪なのである。彼女はステンドグラス職人だと思っていたフェリシアンが、名家オートクール家の後継者であり、司教の息子であることを初めて、奇跡行列に参列していたことで知る。ユベルティエヌだけではなく、フェリシアンの父親も二人の結婚に猛反対する。しかしここで注目したいのは、頑なに息子の結婚に反対していた父親の心変わりである。父親が宗教の道に入ったのも、愛する妻の命を息子の出産で奪われ、二十年あまり経ち、神に仕えながらその傷を癒し、ようやく息子を許す決意をして呼び戻したという設定である。純粹無垢で、『黄金伝説』だけで教育され、無知の状況の中で育ったアンジェリックは、ひたすらフェリシアンとの結婚の許しを得るために、父親に会いに行き、オートクール礼拝堂で司教に訴える。すみれ色の目をした、美しい金髪のアンジェリックは、熱心に懇願するが、最後は「絶対にだめだ」と言う司教の言葉で終わる。しかし、言葉とは裏腹に何かが司教の琴線にふれ、欲望を完全に抑圧し、人間味を押し殺した司教の硬く固まった心は動く。まさにそれが髪の奇跡であった。

「司教様、私たちは愛し合っているのです。きっとあの人もあなたにどのような事情であるかを説明したと思います。私もしばしば自分で答えられないながらも、その事情を自問してきました。私たちは愛し合っているのです。そしてそれが罪であるとしても、どうぞその罪を許してください。なぜなら、その罪は遠くから私たちを取り巻いている樹木や石材そのものから生じたのです。」(中略) 司教は彼女をじっと見た。彼女は花束のような芳香を漂わせて、とてもすがすがしく、とても質素な職人服に身を包まれていた。司教は彼女の次第に強固になっていく、魅力あるしみ透るような声での愛の讃歌の語りに関心していた。そのうちに庭帽子が肩の上に滑り落ち、その輝くばかりの髪が彼女の顔を純粹な金色の後光になって照らした。そして彼にとって彼女はかぼそく、原始的で、激しい情熱の中に身を躍らせる清らかで情熱的な何ものかを備えた、古い祈禱書にある伝説の乙女のように思われた²⁴。

アンジェリックのフェリシアンに対する愛の讃歌が切々と歌われる。ここでは、聖女アニェスが、言い寄る長官の息子にイエスの美点を挙げ、熱心にイエスへの強い愛を訴えたと同じように、情熱的な場面である。簡素で粗末な風情のアンジェリックであったが、帽子が落ちて金色の髪が解けて広がると、後光の射したかのように金色の髪が輝き、伝説の乙女と見まがうほど、司教はアンジェリックの美しさに見惚れる。

ああ、自分の足元に恋のために狂ったかのようにひれ伏しているこの子供！ 自分の前にかがめた首筋から立ち昇るこの若々しさの芳香！ そこに司教はかって狂おしいほどに接吻した愛らしいブロンドの髪を再び見出した。彼女の思い出が苦行の後二十年にわたって彼を苦しめたが、彼女もこのような若さの芳香、百合のような優雅さ、誇り高いこのような首筋を持っていたのである。彼女が蘇っ

²³ *Ibid.*, p. 603.

²⁴ *Ibid.*, p. 662.

なのだ。この情熱にお慈悲をと嘆願し、すすり泣いているのは彼女自身であったのだ²⁵。

その金色の髪は、かつて愛した妻を思い出させ、人間らしい愛情をよみがえらせた。美しい首筋は、狂おしいほど接吻をした髪と共に、抑圧していた心にかつての感覚的愛を蘇らせるという奇跡を起こすのである。

『黄金伝説』のアニエスの「黄金の髪」に着想を得て、視覚的にまたゾラの美学に則り展開されながら『夢』は執筆されたが、第3章では1897年に書かれた「黄金の髪」自体がテーマになり物語化されている夢幻オペラ『長い髪のヴィオレーヌ』を見てみたい。

第3章：『長い髪のヴィオレーヌ』において黄金の髪が象徴するもの

3-1. 守護神としての黄金の髪

髪のテーマが共通することから、ジャン＝ルイ・カバネスはアンジェリックの『夢』と『長い髪のヴィオレーヌ』を比べているが²⁶、本章では『夢』(1888)と『四福音書』(『豊穡』(1899)、『労働』(1901)、『真実』(1903)、『正義』は未刊)の間に書かれた作品である『長い髪のヴィオレーヌ』において、「黄金の髪」が果たす役割が、同じように重要でありながら、どのように『黄金伝説』や『夢』とは違うのか、「黄金の髪」がゾラの後期の作品群にとって、どのような位置づけになっているのかについて見ることにしよう。

『長い髪のヴィオレーヌ』の草稿資料は消失しているが、106枚という表示が記載されているリストのみ残っている。この作品は夢幻オペラ *féerie lyrique* の台本であるが、実際にはオペラ化はされておらず、ゾラの死後、1921年に未発表作品の選集の中で公開されただけである²⁷。真実味と厳格さを身上に執筆されるゾラの中であって、最初奇異に感じられがちなこの夢幻劇という形式を、ゾラは『ニノンへのコント』(1864)でも一部使っており、自然主義理論を展開する『演劇における自然主義』(1881)では「私は演劇において現実を蔑視できるやり方は夢幻劇のみであると認めるし、夢幻劇を好んでいる。この形式の中では、皆全く慣習のままにいられるし、奔放な想像力が使え、その魅力といえば、この地上の全ての現実を欺き、そこから逃避できることなのだ²⁸。」と述べている。

したがってこの夢幻劇『長い髪のヴィオレーヌ』は妖精たちが現れる夢幻境の世界であり、現実を背景とする『夢』や、聖人に関する言伝えを文字化した『黄金伝説』とは様相や意味するものが大きく異なっている。物語の軸となっているのは「黄金の長い髪」であり、髪そのものが物質化し、物語の結末では長い髪に花が開花し、崩壊寸前の王国にまた黄金時代が戻ってくるというもので、髪が愛や生命の象徴になっている点で、『黄金伝説』や『夢』とは異なっている。しかし『長い髪のヴィオレーヌ』の中における「黄金の髪」の役割は、『黄金伝説』の長く伸びる奇跡の髪がアニエスを守った点で、また『夢』では頑なな司教の拒絶の心をとかし、受け入れる気持ちに変え、アンジェリックを苦悩から救った奇跡の髪という点で、『長い髪のヴィオレーヌ』ではヴィオレーヌの貞節を危機から守る守護神としての役割は共通している。

王位を略奪したアルベリックが権力をかざして、暴力的にヴィオレーヌを手に入れようとする場面で、ヴィオレーヌの「黄金の髪」がその超自然の力で彼女を守る。

²⁵ *Ibid.*, p. 662.

²⁶ Jean-Louis CABANÈS, « Les chevelures de légende dans *Le Rêve et Violaine la chevelue* », Gisèle Séginger (éd.), *Zola à l'œuvre*, Presses Universitaires de Strasbourg, 2003, p. 147.

²⁷ Préface de Frédéric Robert, Émile Zola, *Œuvres complètes*, Cercle du Livre Précieux, 1969, t.15, p. 635.

²⁸ Émile Zola, *Le Naturalisme au Théâtre*, Bibliothèque Charpentier, 1923, p. 356.

ヴィオレーヌ（とても清らかに）

それでは、やっでご覧なさい。そのようなことになれば、髪が私を覆い、私を守ってくれるでしょう。（アルベリックは彼女の両肩をつかんで抱き締めた。すると彼女の髪が解け、流れるように広がって、まるで金の鎧をつけたように身体をすっぽりと包み込んだ。）さあ、これで私は安心していただけるわ、私の身体は衣に覆われて守られ、もう難攻不落になったのだから。（彼女は平静に、黙って微笑んで、もはや動かなかった。）

アルベリック（後退りしながら、茫然としている）

お前の髪が…！ ああ、これこそ皆が噂していたヴィオレーヌの髪なのか！ 予言された日に、王国を崩壊から救うという、魔法のかけられた髪！ まさにこれが皆を心地よくさせる、乳母の揺りかご物語というものなのか！ だが私は、お前のその髪をシーツにして、お前をものにし、侮辱してやろう。（彼は彼女を捉えようとして、彼女の周りを何度も回るが、超自然の力が働いて、離れたままである。）一体誰が私の手足を縛っているのか？ お前の髪が金の鎧となって体を包むというのは、本当のことだったのか！ 恥じらいで身を包んだお前が目の前にいるというのに、屈強すぎて、私の手はお前をかすめることさえできない。おお、なんという魔力なのか、まるでお前の白い魅惑的な宝が身を寄せる無垢の要塞に立ちはだかれたように、私はお前をうまく捕らえることができない²⁹。

ここでは、権力を振りかざし屈辱的暴言を吐くアルベリックに対し、髪は超自然の力を働かせヴィオレーヌを守るのである。髪に救われたアニェスと同様に守護神の役割を果たしている。

ヴィオレーヌの住む「宇宙のアトリエ」と定義される王国は、花作りを行っているが、今や「崩壊寸前」という設定である。その「王国が崩れる時、長い髪がそこに生まれ、黄金時代を再び取り戻す」と妖精たちは古い賢者の予言を歌い、金色の長い髪に魔法をかけるが、その魔法をかけられたヴィオレーヌの金色の髪が王国を崩壊から救うのである。では王国を救うとされる「黄金の髪」に、ゾラ自身どんな意味を託したのか、ヴィオレーヌの髪に良き未来へと続くメシア的要素を、どのように「黄金の髪」に割り当てているのかを考察したい。

このような「黄金」色に表されるイメージがどのように生じたものなのかを知るために、『長い髪のヴィオレーヌ』（1897）の前に書かれ、黄金がテーマになっている作品『メシドール』（1894）を見てみたい。ゾラにとって、ヴィオレーヌの髪の色である「黄金」色とは何なのか、何を象徴し表現したいのかを考察する。

3-2. 『メシドール』における「黄金」

『メシドール』は『長い髪のヴィオレーヌ』と同じように伝説の形式で書きあげられたオペラの台本であり、1894年にゾラが台本の全5幕を書き上げ、1897年にアルフレッド・ブリュノーがオペラ化した。以後、上演は合計十六回行われており、ゾラのオペラとしては成功作であった。この『メシドール』の後、1897年に『長い髪のヴィオレーヌ』が書かれたが、ゾラはこれをオペラ化しなかった。その理由として、『長い髪のヴィオレーヌ』は、超自然の夢幻オペラという形式は異なるものの、『メシドール』と同じ理念を表現したものであり、内容を変えない限り、音楽化はしない³⁰と作曲家アルフレッド・ブリュノーに言明している。従って、二つの作品は同じ思想を二度、違う形式で表現したことになる。この二つのオペラ作品の共通点とは、アニェスの髪の色である「黄金」色であり、黄金色が作り出す「金」のイメージで

²⁹ Émile Zola, *Œuvres complètes*, Cercle du Livre Précieux, 1969, t. 15, p. 620.

³⁰ *Ibid.*, p. 635.

ある。『メシドール』の筋書きの推進的主題となっているのは村人を豊かに潤していた鉱物としての「金」であるが、砂金を運ぶ水の奪い合いの争いを生み、村人達の友愛を害わせ、融和の村を壊すのもまた「金」であった。主人公ギヨームの母である信心深いヴェロニックは、溪流の水に混じって流れて来る「金」を神からもらっていると信じており、その出現を辿って見つけた「金のカテドラル」で、聖母マリアに抱かれたイエスを見る。

ヴェロニック

ではあなたたち二人とも、水の中を転がりながら運ばれて来るこの金がどこから来るか知らないのですね。むこうにある、崩れた大きな岩の間に、誰も知らない長い回廊があり、その先に進むと、生けるものが決して誰も足を踏み入れたことのない巨大な金のカテドラルがあるのです³¹。

しかし伝説で語られていた通り、人間であるヴェロニックがその「金のカテドラル」に入った途端にカテドラルは崩壊し、イエスのいたカテドラルは消失し、金も消えるのである。そして砂金からとった金を売って生きてきた村人たちは貧困に喘ぐことになる。しかし主人公ギヨームは、荒地の川底を絶え間なく耕作し、過酷な労働に耐えながら川底を「黄金色」の小麦畑に変える。「金」の代替として人間の労働が作る「豊穡」を手に入れるのである。神からの恩恵物としての「金」は消失したが、しかし人間の「労働」が生み出す豊饒な黄金の小麦畑を得る。黄金のイメージは全く変わるのである。

群衆

勝ち誇る春の中で、これは労働の祭りである。神の水が大地の下を流れ、素晴らしい豊穡が春になって不毛な土地から噴き出した。そしてはや金はなくなり、小麦だけしかない³²。

ここでは、豊作を祈る農民の行列が、労働を称え、大地の開花と豊穡に歓喜する。ギヨームの労働が作る黄金色の小麦畑は「豊穡」の象徴である。それはまたエレヌとの無垢な「愛」を取り戻すことを可能にする。エレヌへの愛は、子供で溢れる、満ち足りた「生活」であり、黄金色のイメージは「多産」の象徴とも重なり、豊かさや愛の溢れる未来を予感させている。

3-3. 豊穡と労働の讃歌としての髪

『長い髪のヴィオレーヌ』は、今まで書かれてきたアニエスの髪や、『夢』のアンジェリックの髪とは、第3章の1で述べたように守護神としての役割は共通であるが、様相や意味は違ってきている。この夢幻オペラでは、ヴィオレーヌの髪が妖精の呪文により魔法をかけられ、超自然の現象が起こるという想定があるが、第3章の2で述べたように、前作である『メシドール』を書いたことで、「黄金」に新たな要素である愛と豊穡が加わり、ヴィオレーヌの髪にそれらがすべて溶けこんだと考えることができる。

『長い髪のヴィオレーヌ』の状況設定は、王国が崩壊寸前であり、それを妖精たちに魔法をかけられた髪を持つヴィオレーヌが、王と結婚することにより、黄金時代を取り戻すというものである。かつて王国の黄金時代には、人々は幸福で友愛に満ち、美しい花作りの労働を行っていた。しかし次第に一部の人々だけが王のように裕福になり、贅沢と欲望を追求するあまり、王国を墮落させ、労働は蔑視されていく。さらに自然の大地には一輪の花も咲かず、花の出荷は停止し、寂しい春を迎えるという設定である。そこに水、大気、火の三人の妖精たちが現れ、妖精の女王フロリアンと共に長い髪の伝説を歌う。古代の言伝え

³¹ *Ibid.*, p. 552.

³² *Ibid.*, p. 580.

と黄金の長い髪の組み合わせは、アニエスの奇跡の髪を彷彿とさせ、開花と豊穡が生まれることを示唆する。

フロリアン

そう、古い賢者の予言はこう告げている。

王国が壊れるとき、長い髪がそこに生まれ、彼女の髪が大地に降りていき、開花し、そしてそこに黄金時代が再び作られるであろう³³。

長い髪のヴィオレーヌは、妖精たちが仕える「運命の神 (Destin) に選ばれし者であり、やがて人々の解放者になるであろう」と妖精は予告する。神に選ばれた運命の人であり、人々を解放し、人々を救う役目を担っている。

ヴィオレーヌ (立ち上がりながら)

森の樹液が私の上を流れていた。ああ、何ということでしょう！ 見てごらんなさい。奇跡だわ！ 私の髪がどんどん伸びてきて大きくなり、私をいっぱい満たしていく³⁴！

ヴィオレーヌは、自分の髪が森の樹液を受け、植物のように伸び、豊かな髪は、身体を埋め尽くすほど大きくなるのを感じる。髪は植物化し、豊穡な自然が隠喩される。『メシドール』の黄金色の小麦畑と同様、長く伸びたヴィオレーヌの黄金色の髪は、崩壊の危機にある王国を救済するものとして差し出される。髪は大地まで伸び、大地の養分を吸い上げて開花し、豊穡をもたらすものとして、民衆を救い導くために差し伸べられた手であり、愛であり、豊穡の象徴である。

またヴィオレーヌの髪は労働の讃歌としても描かれる。ヴィオレーヌは花作りをする女労働者であり、労働はヴィオレーヌの血を生き生きとした赤い血にすると語り、労働が作った「赤い血」を有閑階級で力強さを失った王シルヴェールは求める。

シルヴェール (喜び、非常に陽気に)

(中略) そうとも、私の血は、力と自由を浴びる事が必要だ。そして私は、髪が純潔さと労働の良い香りを放っている豊かな髪のヴィオレーヌをすでに愛している³⁵。

このように、王シルヴェールは流れるような黄金の豊かな髪を称え、労働が作る健康的で豊饒な生命力に魅了される。

シルヴェール

ああ！ この流れるような金の豊かな髪よ、純潔さでお前を包むこの豪華なマントーよ。このとても優しく、とても恐ろしい波動の起きる海よ。私はそこで、労働者であるお前の赤く、豊饒な血を少しばかり飲むつもりだ³⁶。

妖精たちに魔法をかけられたヴィオレーヌの髪は、最後に開花を迎え、三人の妖精は地上に豊穡が戻っ

³³ *Ibid.*, p. 598.

³⁴ *Ibid.*, p. 601.

³⁵ *Ibid.*, p. 605.

³⁶ *Ibid.*, p. 609.

たことに歡喜するのである。

ネレ、セリ、リュス

芽が吹き出し、全てが燃え上がり、受粉して、子供を産む。大地に若さと愛の生き生きとした髪を取り戻させる奇跡の開花である³⁷。

崩壊寸前であった王国の大地に、芽が吹き出し、開花や、受粉が実現し、王国は再び息を吹き返し、黄金時代の再来を知らせる。

ヴィオレーヌ (震えて、喜びながら)

偉大なる神よ！ 何という烈しい樹液でしょう。あなたの接吻が、私から湧き出させたのです。

シルヴェール (彼女を見て喜ぶ)

奇跡だ。生命が我々の上に生まれ、お前の髪に薔薇が咲き誇った³⁸。

妖精の予言どおり、開花の奇跡が起こり、ヴィオレーヌの若さと愛が詰まった生き生きとした髪は開花する。髪は「生命」を生む「豊穡」を象徴している。

ゾラは同時に、未来に対する理想社会実現の可能性も髪を通して描いている。それは、社会的な階級の撤廃であり、社会主義的平等を目指すゾラの世界観であるユートピアへの志向である。王は民衆の中に下っていき、労働者ヴィオレーヌとの結婚を申し出るが、そこでは古く、不毛な秩序の象徴である王制の終焉を告げる新しい考えが述べられる。

シルヴェール (民衆の真ん中で)

わが友である民衆諸君、私は君たちと一緒にいる。私はもう君たちの友であるシルヴェールにすぎない。ヴィオレーヌは君たちのところへ戻るであろう。そしてもし諸君が彼女を花嫁として与えてくれるなら、ああ、民よ、それは黄金時代が我々二人から再び生まれるということなのである³⁹。

また、長い黄金の髪を持つヴィオレーヌを愛することにより、ユートピア的社会の実現、民衆と共に王も労働すること、そして平等な富の分配も宣言される。

シルヴェール (民衆に向かって)

私の民である諸君！ 今度は私から君たちに贈り物をしたい。私の王国だ。こんなことは今まで聞いたこともないだろう。民衆のために王位を投げ出し、儉しい人々、つまり労働者のところへ、共に宇宙の仕事をするために戻っていく王など！

民衆

友である王よ、あなたの王冠の贈り物を有難く頂くことにしよう。私たちはその王冠で娘たちの結婚

³⁷ *Ibid.*, p. 632.

³⁸ *Ibid.*, p. 633.

³⁹ *Ibid.*, p. 623.

のために、金の指輪を作ってやるつもりだ⁴⁰。

ヴィオレーヌの長い黄金の髪は、王制の廃止、みな平等に労働者として前進していき、黄金時代を再び取り戻すという社会的思想にまで影響する。アンリ・ミットランがゾラの作品変遷を分析している中で述べている、社会主義的「第三のゾラ」の思考へと変化していく⁴¹。

民衆

奇跡だ、奇跡だ。黄金時代がまたやって来た。もはや失業はなくなり、皆、仕事にありつけるのだ。喜びと友愛の中で、やっと開花が起きたのだ⁴²！

ヴィオレーヌの長い髪は、このように、守護神としての役割ばかりではなく、豊穡を生む「労働」への讃歌となり、また友愛に満ちた理想郷への希望の象徴としての役割を持ちつつ描かれた。

おわりに

聖女アニエスの「長い黄金の髪」を一つの動機（モチーフ）として、変奏されてきた作品として、三つの作品を見てきた。タイトルを音楽用語である変奏としたのは、『夢』を別とすれば、『長い髪のヴィオレーヌ』と『メシドール』がオペラ台本であり、音楽と関係があるということで、敢えてこの語を使用した。変奏の定義をするとすれば、あるモチーフを変化させ厳格に又は、自由に発展させていくことである。『黄金伝説』の奇跡の髪は、ゾラの作品の時系列にそって、大いに変遷していることを感じる事ができた。

『ルーゴン＝マッカール叢書』の『夢』では、彼方の世界、幻想的世界で陶酔させるような幸福感から、最後は死の不幸という現実で終わるのだが、その中で、『黄金伝説』から受け継がれた金色の髪は、頑なに司教の心をとくすことの出来るレミニサンスとして機能した。しかし、現実を正確に捉えるゾラの目には現実世界の厳しさはあくまで写實的に描かれている。

一方、オペラ台本の『メシドール』は黄金がテーマであり、バレエや、音楽などを駆使した、総合芸術として描かれた。人々を魅了してやまない金の神話は、現実的「労働」による「豊饒」を生むものへと変わり、金のイメージを拓げたものであった。

そしてその四年後に書かれた『長い髪のヴィオレーヌ』における髪の変奏は夢幻劇の形式で描かれ、奇跡を起こす「守護神」としてばかりでなく、人間に「豊穡」をもたらし、黄金時代を再び創るという役割を持ちつつ、ユートピアへの希求を幻想的なタッチで描いたものであった。

髪に込められたメッセージは多く、その概念は未来の理想郷を目指す、ゾラの『四福音書』の小説群へとつながっていく。

また実生活においては、1890年辺りからゾラは写真に興味を持ち、1894年からは本格的に写真家として、数多くの写真を残している。その中で、とりわけ愛人ジャンヌ・ロズロの長い髪の写真を数多く撮っているのが印象的である。長い髪に実生活においても、大いに魅力を感じていたと言える⁴³。ロズロとの出会いが、作家としてのゾラの人生においても、大きな変遷の契機だったのである。

⁴⁰ *Ibid.*, p. 631.

⁴¹ Henri Mitterand, *Zola, L'histoire et la fiction*, Presses Universitaires de France, 1990, p. 251.

⁴² Émile Zola, *Œuvres complètes*, Cercle du Livre Précieux, 1969, t.15, p. 633.

⁴³ François Émile-Zola et Massin, *Zola Photographe*, Hoëbeke, 1990, p. 7.

参考文献

- Emile Zola, *Le Rêve*, *Œuvres complètes*, Nouveau Monde, 2006, t. 13.
- Emile Zola, *Le Rêve*, Le livre de poche classique, Librairie Générale Française, 2003.
- Emile Zola, *Le Rêve*, Folio classique, Gallimard, 2007.
- Emile Zola, *Le Rêve*, « Bibliothèque de la Pléiade », Gallimard, 1966, t. IV.
- Emile Zola, *Œuvres complètes*, Cercle du Livre Précieux, 1969, t. 15.
- Emile Zola, *Œuvres complètes*, Nouveau Monde, 2008, t. 17.
- Émile Zola, *Le Naturalisme au Théâtre*, Bibliothèque Charpentier, 1923,
- François Emile-Zola et Massin, *Zola Photographe*, Hoëbeke, 1990.
- Jean-Louis CABANÈS, « Rêver *La Légende dorée* », Les Cahiers Naturalistes, 2002.
- Jacques De Voragine, *La Légende Dorée*, Texte traduit par Alain Boureau, Gallimard, 2004.
- Torahiko Terada, « Des saints de *La Légende dorée* au *Rêve* : la genèse des stéréotypes », Gisèle Séginger (éd.), *Zola à l'œuvre*, Presses Universitaires de Strasbourg, 2003.
- Henri Mitterand, *Zola, tel qu'en lui-même*, Presses Universitaires de France, 2009.
- Jean-Pierre Leduc-Adine et Henri Mittrand, *Lire/Délire Zola*, Nouveau Monde, 2004.
- エミール・ゾラ著 小田光雄訳 『夢想』《ルーゴン=マッカール叢書》第16巻, 論創社, 2004.
- 加賀山孝子 『エミール・ゾラ断章』早美出版社, 2000.
- ヤコブス・デ・ウォラギネ著 前田敬作, 山口裕訳 『黄金伝説』第一巻, 平凡社ライブラリー, 2006.